

第114回

「新感覚派のスー・パー・レディ」
「ユーミン」登場の頃

第1次石油ショックの影響で、トイレットペーパーの買い占め騒動が勃発した昭和48年11月のある日、夏の終わりにようやく就職先が決まった私は、東京・自由が丘駅そば東急プラザ4階の東光ソハラ楽器で、発売間もない1枚のLPレコードを紹介されました。

そのLPは、十代の女性のデビュー盤でしたが、その女性歌手のことを知らないうえ、まだ学生だった私は小遣いに余裕があったわけでもなく、結局、『HIKOKI GUMO』というタイトル文字がおしゃれにデザインされたLPを購入したのは翌年になってから、彼女の2枚目のアルバムが発売されたときでした。

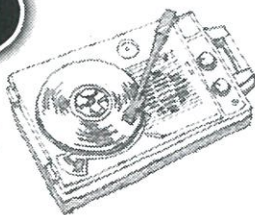
荒井由実のデビューアルバム『ひこうき雲』の帯には、まだ珍しかった女性シンガーソングライターを印象付ける「魔女か！ スーパー・レディか！ 新感覚派 登場」などといった惹句が記されていました。文学性と映像性を想起させる「新感覚派」という言葉は、後年、宮崎駿が『魔

女の宅急便』でユーミンの曲を使用する予言のようでもありますね。

荒井由実の第2弾LP『ミスリム』

名曲カルテ

昭和歌謡と
いままで



堀井六郎
絵 松本浦

はソハラ楽器のレコード棚に何枚も並べられていて、ビニール袋には購入者プレゼントとして「Yuming」と書かれた直筆色紙が入っていました。LPは色紙とともにしばらく残ったままでした。

しかし、この2枚のアルバムによってユーミンの楽曲のすばらしさに魅せられた私は、その動向に注目するようになっていたところ、ソハラ楽器の副店長から「荒井由実ファンクラブ」入会の誘いを受けます。クラブの事務局が多摩美大にほど近いソハラ楽器店内になっていて、望むところとばかりに入会した私の会員番号は「264」でした（少々自慢）。『ミスリム』発売から4か月後の昭和50年2月、ユーミンは赤い鳥から分派誕生したハイ・ファイ・セットのデビューシングル

用に『卒業写真』を提供、同年8月には世間的にまだ無名だったフォークデュオのパンパンに『いちご白書』をもう一度』を提示します。両曲とも、卒業後に学生時



代を振り返るというストーリーを基本に、過去を甦らせる素材としてアルバムや映画のポスターなど、身近に実在するものをとり込むことで歌との距離を縮め、若者の共感を得ることに成功します。

ダスティン・ホフマンが主演しサイモン&ガーファングルの楽曲がふんだんに使われた映画『卒業』と、学園闘争をテーマに『サークル・ゲーム』『平和を我等に』などのヒット曲が流れる映画『いちご白書』は「アメリカン・ニューシネマ」の代表として知られていますが、映画の邦題を活用したユーミンの2作品は、結果として「ニューミュージック」という新たな音楽の括りにふさわしいものだったのかもしれない。

『いちご白書』を『白いユーミンはアグネス・チャンに『白いくつ下は似合わない』を提供して歌謡曲の世界に進出、吉田拓郎が『襟裳岬』（森進一）で端緒を開いた「歌謡曲と和製フォークの合流」に勢いをつけることになりました。